

平成25年度 学校評価結果報告書

小松市立中海小学校

	自己評価				学校関係者評価		
	評価項目と具体的取組	評価指標	達成度判断基準	取組の状況	達成状況	学校関係者評価者による意見	
① 組織的な学校運営	〈組織的・機能的な学校運営〉	【努力指標】	運営委員会を	・月1回の定期開催に加え、年度当初・年度末においては、必要に応じて開催できた。 ・開催にあたっては、各主任と教頭が事前に打合せ(提案文書・内容のチェック)を行い、議事の精選を図り、十分な意見交換ができるように努めている。	A	・運営委員会では、毎月適切な議題があげられている。 ・定期的に月1回の会をもつのは良い。	・例年通りの行事を行う場合でも、実施計画を立てる時には、必ず、現在の児童の状況を考慮して、見直しをかける。そのためにも部として取り組む。 ・全職員の共通理解のもと、PDCAのサイクルを意識した取り組みを行う。 ・危機管理、いじめ・不登校対策に関する取り組みを評価項目に加えることを検討する。
	校長の学校経営構想のもとで、各主任を核とした組織的・機能的な学校運営を行う。	運営委員会を定期的に開催し、諸課題の解決に努める。	A: 定期的に有効に開催できた B: 定期的に開催できた C: 開催できないこともあった D: 十分に開催できなかった				
② 確かな学力の育成	〈学校経営構想の具現化〉	【成果指標】	各部の年間計画を	・各主任を中心に、年間計画が立案され、順調に実践された。 ・例年通りの取り組みが多く、行事等を実施した後のアンケートなどが十分に生かされていない。	B	・各部の反省から学校の運営状況が良く分かる。	
	各主任を中心に、校務分掌の年間計画を作成し実施する。	児童の生きた力となるように、各部でそれぞれの活動を協議し実践する。	A: 十分に実践できた B: 実践できた C: あまりできなかった D: できなかった				
② 確かな学力の育成	〈基礎・基本の学力の定着〉	【成果指標】	基礎・基本の定着度が	・学力向上プランに基づき、ねらいを明確にしたわかる授業づくりに取り組んでいる。 ・朝と昼に学習タイムを設定している。(朝は、基礎・基本の確認を中心とし、昼は活用力をつける課題も行う。)	A	・基礎・基本の知識が身につけているのは良いことであるが、文字を読みやすく、しっかり書く指導も必要。掲示物を見ると、低学年は、1文字・1文字しっかり書いているが、高学年の中には、雑で非常に読みにくい文字のものがある。	・明確な意図をもった学習タイム(ロングチャレンジタイムなど)を継続する。この場合、学担任せにならないように、学習指導部が中心となって取り組む。 ・「書く」ことについては、教科だけでなく教育活動全般においてしっかり指導を行っていく。
	読み・書き・計算の基本をしっかり定着させ、わかる授業の実践に努める。 【学びの指針4条】	国語科・算数科の基礎・基本が8割以上できる子が80%を越えるようにする。	A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	・家庭と連携のもと学年×10分の家庭学習の習慣化に取り組んでいる。 ・国語科の授業とタイアップした図書コーナーの設置を行っている。			

次年度の方向(改善計画等)

学校関係者評価者による意見

	自己評価				学校関係者評価	次年度の方向(改善計画等) □	
	評価項目と具体的取組	評価指標	達成度判断基準	取組の状況	達成状況		学校関係者評価者□による意見
② 確かな学力の育成	(授業改善)	【努力指標】	学び合いのある授業を、学期に	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 学び合いの目的や学び合いの姿を共通理解できた。</li> <li>• 授業の約束、聴くとき・話すときの約束を統一(教室掲示)し、全学年で取り組んでいる。</li> <li>• 理科・生活科を中心に学び合いのある授業の研究を行っている。</li> <li>• 児童は、自分の考えと比較して相手の考えを聞くことができていない。</li> <li>• 単元のどこで学び合いを取り入れるか構想を立てるための研究が不十分。</li> </ul>	C	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 保育所でも自分の思いを伝える活動を行っている。小学校の現状とよく似ており、伝えるところから次の段階へ進むことができない。今後どのように進めていくか、連携するのも良い。</li> <li>• 学び合いが難しいということであるが、児童が進んで意見を交流できない原因を考えていくことが大切。</li> <li>• 授業参観で、高学年では映像なども利用して発表していた。表現する力はあると思う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 学力(特に、活用力)の向上は、本校において最大の課題となっている。学び合いを成立させることがその対策ととらえている。研究主任を核として、学び合いを充実させる手立てを研究し、実践に移していく。</li> </ul>
	「学び合う子」の育成をめざして授業改善に努める。 【学びの指針 1, 2, 3, 5, 6条】	学習の振り返りを書かせ、交流し、学び合いのある授業を行う。	A: 全単元  B: 全単元の2/3以上  C: 全単元の半分  D: できなかった				
③ 豊かな心の育成	(積極的な生徒指導)	【満足度指標】	3機能の視点をもって研究授業を	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 生徒指導訪問では、全学年で研究授業を行った。また、全体会において、「3機能を生かした授業づくり」をテーマに日々の実践を交流した。</li> <li>• 年6回の研究授業が行われた。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 授業参観の様子から、低学年では、発表する子を周りの子が一生懸命励ましていた。このようなことが大切。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 今後も生徒指導の3機能を意識した学級経営・授業づくりを行っていく。</li> <li>• 授業のみならず学校生活のいろいろな場面で個々の児童が持つ良さを見つける目を大切にする。(教師が見つめることも大切であるが、子どもどうして見つけることも大切にしていく。)</li> </ul>
	学習指導部とタイアップし、生徒指導の3機能をいかした授業づくりを推進する。 【学びの指針 7, 11条】	3機能の視点を持った研究授業を年間6回以上行う。	A: 7回以上  B: 6回以上  C: 5回以上  D: 5回未満				
	(思いやりのある子の育成)	【満足度指標】	楽しいと感じている児童が	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 生徒指導の3機能を意識した学級経営に努めている。</li> <li>• 職員会議等いろいろな機会を利用して、児童の様子で気になることはないか交流している。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 児童アンケートで「いいえ」と答えている人数に注目すると、どの問いに対しても同じくらいの数になる。同じ子が「いいえ」と答えていると考えられないか。例えば、学校が楽しくないと思っている児童は勉強が楽しくないと答えていると考えられる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 楽しさも大切であるが、時には嫌なこと(でもやらなければならないこと)や苦しいこと(でもやりきると大きく成長できること)にチャレンジさせたり、じっくり自分を見つめ直す時間を持つ指導も必要。</li> <li>• 機会をとらえて児童の様子を交流し、小さな変化を見逃さないようにしていく。その上で、個に応じた声かけを大切にしていく。</li> </ul>
	自他ともに認め合い、学校に来ることが楽しく感じる子どもを育てる。 【学びの指針 5, 6条】	学校へ来ることが楽しいと感じる子が8割以上になるように努める。	A: 90%以上  B: 80%以上  C: 70%以上  D: 70%未満				

	自己評価				学校関係者評価	次年度の方向(改善計画等) □	
	評価項目と具体的取組	評価指標	達成度判断基準	取組の状況	達成状況		学校関係者評価者による意見
③ 豊かな心の育成	〈たて割り活動による豊かな人間関係づくり〉	【満足度指標】	交流の楽しさと良さを感じた児童が	・縦割り遠足・給食、町別子ども会、全校縦割りゲーム等を実施した。 ・2学期の活動が少ない。(運動会や表現会の関係。) ・企画・運営にあたる高学年の中には、達成感や充実感を得ることができなかった児童がいる。	B	・縦割り活動は、学年1学級の本校にとって、自分の学級以外の児童と触れ合うことができる重要な機会となっている。 ・縦割り活動は、リーダーとして活動する高学年の児童を育てることにつながる。 ・6年生が読み聞かせを行っているが、聞く側の児童を低学年と中学年に分けて行ってもよいのではないか。低学年に向けた本と中学年に向けた本では内容が違うと思う。	・道徳の授業を中心として、望ましい集団の在り方を考えさせる。 ・例年通りの取り組みも見直しをかけ、より良い縦割り活動を目指す。児童のアイデアを生かすことも考えられる。
	異年齢集団による活動を通して、学年の枠を越えた人間関係に気づかせ広げる手立てを行う。 【学びの指針2条】	学年に応じた目的で楽しく活動しながら、異学年のよさや様々な見方、考え方があることに気づくことができる。	A:90%以上 B:80%以上 C:70%以上 D:70%未満	内容工夫した授業を学期に		・道徳の単数はしっかり確保できた。 ・ロールプレイングやアイスブレイクゲームが授業に取り入れられた。 ・学習したことを掲示することで、さらに考えを広めたり、深めたりしている。	A
④ 健やかな身体の育成	〈たくましい体の育成〉	【努力指標】	体育カードの活用や校内各種大会に	・器械運動競技会の練習(5・6年)、鉄棒がんばりカード(全学年)、外遊び週間等の取り組みを行った。	A	・子どもの数が少ない町内もあり、家に帰ると広場などで遊んでいる子どもはほとんどいない。学校で精一杯体を動かせると良い。	・生徒指導部と連携して、縦割り活動等において体を動かす遊びを企画していく。特に、冬期グラウンドが使用できない場合の遊びを工夫していく。 ・器械運動競技会のリハーサル等全校を巻き込んだ活動を継続する。
	体育科や特別活動での体育的活動を通して、スポーツや体を動かすことの楽しさを知る。	各体育カードを活用したり校内各種大会に取り組む。	A:十分に取組んでいる B:取り組んでいる C:あまり取り組んでいない D:取り組んでいない	診療カードの受診率が		・全校集会や保健便りで早期の治療を呼び掛けた。 ・未受診の児童とその保護者には、個別の働きかけを行った。	A
	〈健康教育〉	【努力指標】	自らの健康に興味や関心を持つ児童の育成に努める。	自らの健康に興味を持ち健康的な生活を送れるように努めている。	A:80%以上 B:70%以上 C:60%以上 D:60%未満		

	自己評価				学校関係者評価	次年度の方向(改善計画等) □	
	評価項目と具体的取組	評価指標	達成度判断基準	取組の状況	達成状況		学校関係者評価者による意見
⑤ 家庭・地域との連携	(基本的生活の確立)	【努力指標】	早寝・早起き・朝ごはんが実行できている児童が	・早寝・早起き・朝ごはんの大切さはほぼ認識されており、保護者の協力のもと、行われている。 ・1月のアンケートでは、早寝・早起きができない児童が増えている。(高学年に多い。)	B	・早寝・早起き・朝ごはんはよくできている。挨拶について、大人からも積極的に声をかけていく心掛けが必要。	・早寝・早起き・朝ごはんは家庭の協力もあり、ほぼできているといえる。今後は、児童自身が自分の意志でできるようにすることを重視していく。 (健康教育の一環として考える。望ましい生活習慣が、健全な心と体を育てるという視点。)
	家庭と連携して早寝・早起き・朝ごはん運動を推進する。	早寝・早起き・朝ごはんが実行できている子を9割以上にする。	A:90%以上 B:80%以上 C:70%以上 D:70%未満				
	〈家庭学習と読書の習慣化〉	【成果指標】	毎日取り組んでいる子の割合が	・「かすかみっ子通信」を発行し、学年に応じた家庭学習の在り方を確立している。 ・期間を決めて家庭学習の「がんばり週間」を実施した。 ・家族読書に取り組んだ。 ・借りた本を学校の休み時間に読み終えてしまう児童も多い。	B	・家庭学習の習慣が身についてきたことは良いことである。	・家庭学習はほぼ習慣化しているといえる。そこで、今後は家庭学習を保護者との連携としてとらえるのではなく、確かな学力を育成するための手立てとしてとらえる方向で検討していく。 ・読書は、家庭学習とは別にして、幅広いジャンルの本に接することで、豊かな心を育てる手立てとなるような方向で検討する。
マニュアル等を作成し家庭学習と読書の定着を図る。 【学びの指針 7, 8, 12条】	学年に応じた内容で、家庭学習(読書)をする。	A:90%以上 B:80%以上 C:70%以上 D:70%未満					
〈信頼される学校づくり〉	【成果指標】	学校の教育活動を知らなくてもらう取り組みを	・年4回の授業参観を行った。 ・学校公開は、昨年度より公開日を増やした。 ・ホームページを開設している。 ・今年度は、テレビ小松で、あいさつ運動の様子が放映された。	A	・学校の様子はよく伝わっている。授業参観や奉仕作業などの参加率も高い。 ・授業参観については、授業を見る保護者の様子に気になるところ(保護者間の私語等)がある。	・地域の方々や保護者との良好な関係を今後も維持していく。そのために、情報の発信はもちろんであるが、直接話ができる機会(学級懇談会、学級レクイエーション、公民館の運営審議委員会、地域行事の実行委員会等)を大切にしていく。 ・次年度、育友会が挨拶をテーマにして研究発表を行う。この機会をとらえ、どのような取り組みをすれば、時と場に応じた自然な挨拶が	
学校での教育活動をより多く知ってもらうように学校公開などの取り組みをする。 【学びの指針 9, 10, 11条】	学校の教育活動を知らなくてもらう取り組みを5種類以上行う。	A:6種類以上行った B:5種類行った C:4種類行った D:3種類以下しか行えなかった					

	自己評価				学校関係者評価	次年度の方向(改善計画等) □	
	評価項目と具体的取組	評価指標	達成度判断基準	取組の状況	達成状況		学校関係者評価者による意見
⑤ 家庭・地域との連携	〈ふるさとから学ぶ〉	【努力指標】	ふるさとから学ぶ体験活動を	・地域の方々のご協力、竹の子掘りと調理、ギフチョウの飼育と観察、田植え等の活動を行った。また、地域へ出て、町探検、駐在所見学、古い道具の見学、お年寄りとの交流会等を行った。	A	・子どもの数が減ったこともあり、地域で子どもと触れ合う機会が少なくなった。地域のお祭りや運動会などの機会を大切にしていかなければならない。	できるようになるか、家庭や地域と連携してその方策を考えていく。
	総合的な学習、体験学習をとおしてふるさとの自然・文化・人々に学び、ふるさとに愛着を持つ子を育てる。	ふるさとや地域の素材を学習材にした体験活動をどの学年も2回以上行う。	A:3回以上行った B:2回行った C:1回行った D:できなかった				